
PROXY

SFサムライ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

PROXY

【著者名】

N4668Y

【作者名】

SFサムライ

【あらすじ】

侵略者から世界の平和を守る春日井一族の物語

プロローグ

朝はどこからやつてくるのだ？。

黄金色に輝く山の際を眺めながら、春日井涼は思ひだつた。

村の北部にある開けた原野。その一帯は闇の中でもそれと分かるほど、どす黒い血に染まっていた。

涼が絞め殺した無数の敵の残骸がそこかしこに転がっていた。

生臭い嫌なにおいが漂う。そのにおいを嫌がるよつて、涼はタバコをくわえて火をつけた。

煙を思い切り吸い込むと、手のひらに残る嫌な触覚もどこかに消えていく。

日が昇るにつれて、残骸からは徐々に白煙があがる。

最初は線香から出るような細長い煙だが、陽が当たり始めると、マグネシウムを燃やしたかのような激しい闪光を放ち、一瞬のうちに残骸も血痕も消え失せる。

最後の瞬間まで見届けることも彼にとって重要な役割のひとつだった。

代々、春日井の家系はそつやつて朝を迎えていた。何者か分からぬ侵略者から村を守ること、それが彼らに託された役割だった。

「お疲れさま。今日も特に怪我がないようだな

労いの言葉に涼は小さく頷く。声は涼の父で春日井教団教主、早瀬のものだった。

「もう慣れたよ。どうせもうこのクラスの雑魚しか残っていないんだわ。強い影は全部親父がやつつけてしまったんだから」

言いがかりでもつけるかのように涼は言つ。

「その気の緩みが仇となることを覚えておいた方が良い。影はいずれ力を取り戻すだろう。お前の代で復活がなかつたとしてもお前の子供の世代で影が大きくなつたとき、お前が自分の息子に力を継げなければ、そのとき人類の歴史は途絶える」

整然と言葉を並べられたといひで、涼にはいまいち実感がなかつた。

「大げさだよ。世界の平和は親父に任せらるつて。今、そういう仕事をしているんだろう?」

「教団には表側からしか世界を救うことしかできない。いやそもそも祈りや義捐金ではそれすらも適わない。影を退治するのは飽くまでお前の役割だ。力を継いだ私には、もう影と戦えるだけの力も残つていないのでから、お前にはしつかり自覚をしてもらわないと困る」

「だいたい影つて何なんだよ」

「分からぬ」

「どうしてこの村にばっかり現れるんだよ

「知らない」

納得のいく答えが返ってきたことは一度だつてなかつた。何を聞いても無駄だ。

そして最後には決まり文句。 - - 影を知りうとするものは . . .

「必ず影に飲み込まれる」

涼と早瀬の声が綺麗に合われる。

何を言つたつて無駄だ。涼はそう思つていたし、早瀬が自分に対しう同じように思つてゐることも気づいていた。

彼ら親子はそりやつて何度も朝を迎えた。そしてこれからもずっとこの朝は続いていく。いずれ早瀬が死んで、その代わりに涼の息子がその場所に立つてゐるだろう。

涼は、自分が父親のように思考を停止させてゐる姿を想像して、ぞつとした。

考えずに影を狩れ。自分の人生の半分がそんなつまらないルーティンワークに消耗されることに腹がたつた。

そして太陽が山の間から顔を見せて、涼の世界がフュイドアウトする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4668y/>

PROXY

2011年11月17日17時31分発行